

米国のばれいしょをめぐる2022年の状況 および2023年の見通し

独立行政法人農畜産業振興機構 調査情報部

1 はじめに

米国では、ロシアによるウクライナ侵攻などを引き金として近年類のないインフレとなり、野菜の生産・流通費も高騰した。このため連邦準備制度理事会は、インフレ抑制に向けて数次にわたり政策金利を引き上げているが、同時に景気後退に転じる可能性もあり、難しいかじ取りを迫られている。このようなことから、米国の野菜は、生産・流通・消費のすべての要素で不確実性が高まっている。

米国は、我が国最大の冷凍ばれいしょの輸入先国であり、同国の生産・流通動向が日本の需給に及ぼす影響は大きい。

今回は、米国農務省（USDA）が毎年2回公表している「Vegetables and Pluses Outlook」（「野菜アウトルック」）の最新版（2022年12月16日公表）を基に、米国のばれいしょをめぐる2022年の状況および23年の見通しを報告する。

単位の換算には、1ポンド=0.4536キログラム、1エーカー=0.4047ヘクタールを、為替レートは、1米ドル135.13円^(注)を使用した。

なお、本稿は独立行政法人農畜産業振興機構が毎月発行する「野菜情報」令和5年4月号に掲載された「米国の野菜をめぐる2022年の状況および2023年の見通し」から、ばれいしょ関連部分を抜粋したものである。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の23年4月末TTS相場。

2 2022年の野菜生産の概況：天候不順により生産量が減少、価格は高騰

カリフォルニア州およびフロリダ州の生鮮野菜の生産者価格は、2022年夏から秋にかけて天候不順により生産量が減少したことにより、上昇した。2022年1～10月の生鮮野菜の平均生産者価格を見ると、たまねぎが前年同期比75%高、レタスが同68%高、ばれいしょが同41%高と大幅に値を上げている（図1）。新植や植え替え分が出荷される12月下旬から翌1月上旬まで、平年を上回って推移すると予想される。

フロリダ州のトマト、パプリカ、かぼちゃなどの主要冬野菜は、2度にわたる大型ハリケーンの襲来により植え替えを余儀なくされた。また、カリフォルニア州では、長期にわたる干ばつ、異常な高温、晩夏の暴

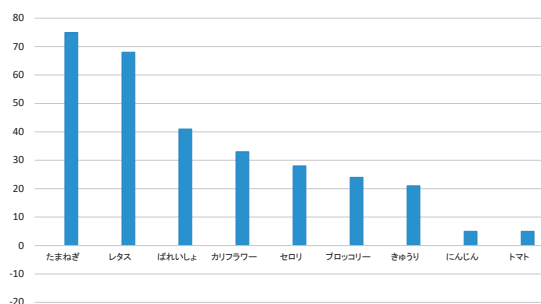


図1 2022年1～10月の生鮮野菜の平均生産者価格の前年同月比 (%)

風雨、病害の影響により、秋の葉物野菜などの供給量が大幅に減少した。さらに、米国への輸出量が多いメキシコ（トマト、ピーマン、かぼちゃ、いんげんなど冬の野菜の主産地）では、ハリケーンが西部および中北部の生産地に影響を及ぼした。

カリフォルニア州の22年の加工用トマト生産量は、前年比2%減の953万トンであった。トマトペーストの在庫が少なく、トマト製品の価格が高いため、加工業者は23年の加工用トマトの生産増を望んでいる。しかし、長引く干ばつや投入資材価格の高騰、競合作物への転換などがトマトの生産拡大

の妨げになっている。なお、19年～22年の野菜産業の概観（作付面積、生産量、輸入額、輸出額、1人当たり供給量）については表1のとおりである。

3 ばれいしょの需給動向

ばれいしょは、米国産野菜の中で単一品目としては輸出量が最も多い。なお、日本への生鮮ばれいしょの塊茎の輸入には植物検疫上厳格な要件が課せられているため、試験研究などの目的を除き商取引上では現実的ではなく、日本の輸入品はほぼ全てが加工品となっている。

表1 2019～22年の野菜産業の概観

項目	2019年	2020年	2021年	2022年	2022年の 前年比(%)
作付面積(単位:千ヘクタール)					
野菜(生鮮・加工用)	890	866	862	702	▲ 18.6
ばれいしょ	379	369	374	367	▲ 1.9
その他 ³	1,236	1,375	1,244	1,237	▲ 5.6
合計	2,505	2,611	2,480	2,306	▲ 7.0
生産量(単位:千トン)					
野菜(生鮮)	13,472	13,063	12,474	12,428	▲ 0.5
野菜(加工用) ⁴	15,966	16,057	15,377	15,195	▲ 1.1
ばれいしょ	19,232	19,051	18,597	18,008	▲ 3.2
その他	2,903	3,357	2,041	2,404	6.7
合計	38,102	38,464	36,015	35,607	▲ 1.0
輸入額(単位:億円)					
野菜(生鮮)	11,501	12,868	13,524	14,118	4.4
野菜(加工用)	4,403	4,924	5,313	6,115	15.1
ばれいしょ	2,066	2,343	2,728	3,411	25.0
その他	950	1,104	1,284	1,527	20.3
合計	25,566	28,701	30,876	34,013	10.2
輸出額(単位:億円)					
野菜(生鮮)	3,234	3,117	3,240	3,350	3.4
野菜(加工用)	2,967	2,754	3,047	3,227	5.9
ばれいしょ	2,601	2,263	2,531	2,658	5.0
その他	897	1,113	1,047	905	▲ 9.0
合計	13,107	12,497	13,332	13,702	2.8
1人当たり供給量(単位:kg)					
野菜(生鮮)	67.7	67.2	66.4	65.8	▲ 1.0
野菜(加工用)	51.3	55.9	51.0	48.5	▲ 4.7
ばれいしょ	51.1	52.2	51.2	51.1	▲ 0.4
その他	6.2	7.4	6.2	6.0	▲ 2.5
合計	176.3	182.7	174.8	171.3	▲ 2.0

資料：USDAのデータを基に機構作成

注1：表中の数字を合計しても必ずしも「合計」とは一致しない。

注2：USDA経済調査局による推計値。

注3：その他には豆類(乾燥品を含む)およびマッシュルームが含まれる。

注4：缶詰、乾燥、冷凍を含むが、ばれいしょおよびマッシュルームは含まない。

(1) 生産量：作付面積と単収の低下により生産量が減少

2022年の米国のばれいしょ生産量は、作付面積の減少（前年比2%減の36万7000ヘクタール）と生育条件の悪化により、1866年以降で初めて5年連続で減少し、前年比3%減の1801万トンとなった。

最大のばれいしょ生産州であるアイダホ州では、作付けの遅れと収穫面積の減少（同6%減）により、01年以降で最低の生産量となった。USDAが調査対象としている13州のうち前年より生産量が増加したのは、ミネソタ州、ネブラスカ州、ワシントン州およびテキサス州だけであった（図2）。

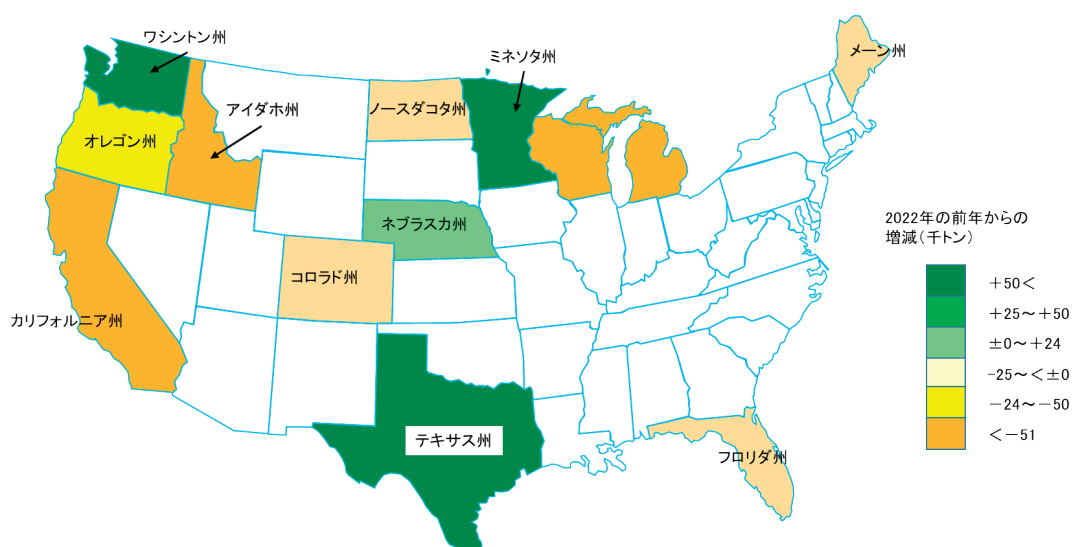
全米のばれいしょの単収は、17年以降で最も低い1ヘクタール当たり49.1トンとなった。4月の低温・多雨により作付けが遅れ、アイダホ州、コロンビア盆地（ワシントン州南部からオレゴン州北部）、ミシガン州およびレッドリバーバレー（ノースダコタ州とミネソタ州の間）といった主要

産地での単収が低下した。さらに、22年の収穫放棄面積は5年平均を上回り、収穫面積は作付面積の84%にとどまった。過去のパターンでは生産量が減少した翌年に作付面積が増加していることから、23年の作付面積は増加すると見込まれる。

(2) 価格：2022年度に向けて高値が継続

2021年度（ばれいしょ年度：21年9月～22年8月）の平均価格（生鮮および加工用を含む）は、100ポンド当たり10.2米ドル（1キログラム当たり30円）を記録した。一部の加工業者は、加工用ばれいしょ不足から生鮮ばれいしょを買い入れており、生鮮ばれいしょ価格のさらなる上昇につながっている。22年のばれいしょ生産量が予想より少なかったことから、22年度の平均価格は21年度の最高値を更新すると見込まれる。

22年の生鮮ばれいしょの週平均生産者価格は上昇し、秋の収穫を控えた8月にピークに達した。22年度最初の3カ月間（9～



資料：USDAを基に機構作成

図2 州別のばれいしょ生産量の変化（2021-22年）

11月)の生鮮ばれいしょの出荷量は、前年同期比3%減となった。22年度の出荷がピークを迎えた11月の週平均生産者価格は、前年同月比46%高であった。

(3) 貿易状況：輸出量は減少も輸出額は過去最高

2021年度のばれいしょおよびばれいしょ製品（でんぷんを含むがデキストリンを除く）の輸出額は前年度比2%増となり、過去最高の2608億円に達した。しかし、ばれいしょ全体の輸出量は、生鮮（同9%減）、冷凍（同4%減）、チップス（同5%減）およびフレーク（同19%減）の輸出量が減少したことから、同6%減の171万トンとなった（表2）。

また、21年度のばれいしょおよびばれい

しょ製品の輸入量は、同12%増の217万トンとなった。生鮮の輸入は、カナダ産が中心となって急増し、前年比24%増の505万トンとなった。冷凍フライドポテト輸入量についても、同12%増の111万トンとなった。この90%をカナダ産が占め、他は主に欧州産となっている。なお、輸入額についても輸入量の増加に伴い増加した。

4 おわりに

本稿執筆時点（2023年4月）では、ロシアのウクライナ侵攻は一向に終息の兆しが見えず、エネルギーをはじめとした投入資材価格の高止まりも続いている。米国のインフレは減速の兆しが見えたとされているものの、同時に景気後退のリスクがあり、仮にインフレが鎮静化しても高付加価値製

表2 ばれいしょ（生鮮・加工）の輸出入量（製品重量）の推移（単位：千トン、%）

品目	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	増減
輸出					
生食用	531.1	463.4	547.8	497.1	▲ 9.3
冷凍合計	1,042.9	930.9	1,040.6	996.7	▲ 4.2
フライドポテト	921.3	819.5	901.0	879.7	▲ 2.4
その他	121.6	111.4	139.5	117.1	▲ 16.1
ポテトチップス	48.8	45.0	50.8	48.1	▲ 5.4
乾燥、脱水、でん粉	10.1	11.0	10.4	13.3	27.6
フレーク・粒状	78.4	83.0	75.6	61.5	▲ 18.7
その他保存加工品	43.5	43.6	45.4	42.8	▲ 5.9
種いも	28.2	30.0	34.4	41.9	21.9
でんぷん	7.9	8.8	6.4	6.5	1.9
合計	1,790.8	1,615.7	1,811.2	1,707.8	▲ 5.7
輸入					
生食用	335.3	410.1	407.2	504.6	23.9
冷凍合計	972.8	1,041.0	1,177.6	1,327.9	12.8
フライドポテト	850.9	859.2	987.7	1,108.4	12.2
その他	121.9	181.8	190.0	219.5	15.5
ポテトチップス	23.9	25.9	31.7	32.1	1.4
乾燥、脱水、でん粉	6.4	7.0	8.7	7.0	▲ 19.4
フレーク・粒状	44.8	53.7	61.9	57.1	▲ 7.7
その他保存加工品	27.3	29.5	34.0	33.3	▲ 1.8
種いも	70.0	70.3	72.9	59.4	▲ 18.6
でんぷん	115.3	131.7	146.6	153.0	4.3
合計	1,595.8	1,769.0	1,940.5	2,174.6	12.0

資料：USDAを基に機構作成

注：ばれいしょ年度は9月から翌年8月まで。

品を中心に野菜の需要が減退する可能性がある。

23年には次期農業法の議論が進められることになっており、生産費の高騰対策や災

害対応を含め、ばれいしょを含めた野菜生産に対してどのような施策が講じられるのか、今後の展開が注目される。